

八幡東やはたひがし

- | | | |
|---|---------------|-----------------|
| 1 | 所在地 | 滋賀県長浜市八幡東町 |
| 2 | 調査期間 | 二〇〇七年（平19）五月～六月 |
| 3 | 発掘機関 | 長浜市教育委員会 |
| 4 | 調査担当者 | 山本孝行 |
| 5 | 遺跡の種類 | 集落跡 |
| 6 | 遺跡の年代 | 弥生時代～古代 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |

八幡東遺跡は、弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡で、旧河道沿いの微高地に立地する。過去の調査では、奈良時代的大型建



(長 浜)

物二棟が検出され、土器の他、和同開珎などが出土している。

今回の発掘調査は市道改良工事に伴うものである。

検出した主な遺構は、奈良時代の溝状遺構一条及び河川の氾濫による堆積層である。木簡は、河川の堆積層

上層より一点出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) •

•
一
〔墨面〕
└

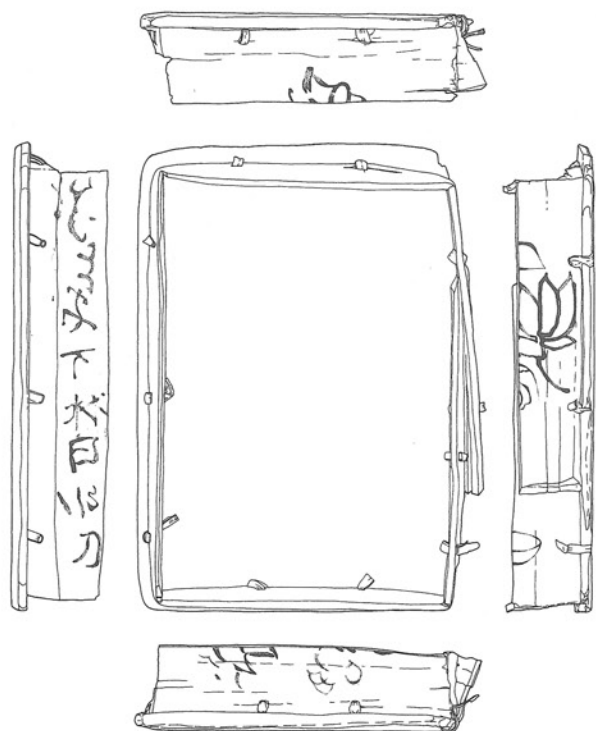
・「墨面」

・「墨面」

220×148×43 061

長方形の底板の上にひとまわり小さい側板をあて、底板に二孔一對、側板に一孔の結合孔をあけ、樺紐で結合した樺皮紐結合折敷の完形品である。底板内面の周縁には低い段をつくらずに、長辺に三カ所、短辺に二カ所の計一〇カ所に結合孔をあけ、底板の一對の孔と樺皮紐で結合している。側板の綴合せ一カ所、一列内二段綴じである。側板には四面ともに墨書ないしは墨画があり、その内一面は文字、他三面は絵である。描かれている絵が分断されていることから、側板は既に書画が記されていた板材の転用と考えられる。共伴遺物及び製作技法から、概ね八世紀頃のものと考えられる。

資料の検討にあたっては、奈良大学の東野治之氏、滋賀県安土城考古博物館の大橋信弥氏・中川正人氏・濱修氏のご教示を得た。



9 関係文献

長浜市教育委員会『八幡東遺跡第三〇次調査報告書』（滋賀県長浜市文化財調査資料八三、二〇〇七年）

（山本孝行）

百年の理由

近年韓国木簡への注目が高まっている。便乗して、一言。韓国南部の城山山城出土木簡は、六世紀前半まで遡るといふ。日本最古の木簡は七世紀半ば。韓国最南端と日本との間の、百年の差は、なぜなのだろうか。

城山山城出土木簡は荷札である。荷札作成の背後には、体系的な徴収システムが必要であろう。新羅ではこうしたシステムが構築されていた事実を示すといえよう。

一方同時期の日本には、まだそうした支配体制が成立していなかったのではないか。だから、単なる付札ならいざ知らず、荷札は導入できなかったのではないか。

荷札が爆発的に増えるのは、七世紀後半。やはり、百済滅亡などの一連の動乱で、日本に渡来した人々が伝えた統治技術とノウハウが、古代日本を近代化した、そういうことなのだろうか。日本古代木簡は百済木簡が導入されたもので、だから新羅木簡と雰囲気が違うのかもしれない。昌原から慶州に向かう車内で、漠然と思った次第である。

（馬場 基）